様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１１７７

研究課題名（和文）＜エチュード（練習曲）＞を用いた声楽教育モデルの開発

研究課題名（英文）Development a model of vocal education with "Etudes"

研究代表者
片野　耕喜（KATANO, Koki）

山梨大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：６０３１４５４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：バロック時代から現代までのさまざまな練習曲の特徴を分析した結果，中級の声楽学習者にとってはやはりコンコーネによる練習曲が，とても有益で役に立つことが分かった。彼の作品は旋律的で美しい曲でありながら，多様な音型やリズムを意識させるように構成されており，また伴奏部にも工夫が凝らしてあり，素晴らしい練習曲であると言える。このほかの練習曲と合わせて，いくつかの声楽学習モデルを作った。

研究成果の概要（英文）：After researching many vocal etudes it resulted in a conclusion that Concone's works have a lot of helpful and useful things. It seems to be the best etudes for students in the middle level.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽教育　声楽教育　発声訓練　発音　演奏様式

１．研究開始当初の背景

声楽の教授に長年携わってきて，発声練習と曲の仕上げを繋ぐ段階のレッスンに苦心してきた。学習者は一音・一瞬の声が出てくるようになると，パッセージや発音の問題を飛び越えてすぐに曲を歌いたくなり，自己流の表現をつけたくなるのは誰にも共通することではある。そのモチベーションそのものはけっして否定されるものではないが，多くの名曲では確かな技術に支えられてのみ表現可能な箇所がたくさんある。では，時につらくて単調な発声の訓練の後に，どのような課題を与えれば練習意欲を持続させつつ，技術と表現を繋ぐようになってくれるかということを悩んだことが，本研究を思い立ち，着手した発端であった。

大学での声楽教育において，声楽の基礎がなく入学してきたにもかかわらず，4 年間である程度の歌唱技術を体得させなければならないことに大きなプレッシャーを感じていた。音楽大学においては個人レッスンの相応の時間が確保されてはいるが，ひとりの声楽教員が姿勢，発声，呼吸，発音，リズム，パッセージの処理，フレーズのなめらかさを実現する技術から，曲の表現・解釈まですべて世話をするのは至難の業である。欧米であれば声楽の学習は大きく二つに分かれ，「発声」と「表現・解釈」を担当する教員が別々に付くのであるから，この差は大きい。

まして私の所属する機関は音楽教育系であることから個人レッスン時間は少なく，入学時までのスキルも低いことから，さらに多くの問題が横たわっている。これらの大きなハンディにもかかわらず，意識の高い学生により効率的で内容のあるレッスンをするにはどうしたら良いかという悩みからこの研究は始まった。

またこのような手法が別な角度からも有益だと考えたのは，中には日本歌曲を主たる研究テーマとして歌っていきたいという学生がいて，そのためにイタリア歌曲などを多く与える中で発声も，響きも，表現も同時並行的にという手段が取りにくいためである。日本語の正統的な響きに固執しすぎるとなかなか舞台での優雅な声の扱いが難しいというのは程度の差こそあれ声楽研究者の間では一致していると思うが，かといって気持ちののらない外国語の歌を多く与えるのも問題が多い。そういった条件の中で，練習曲を母音唱法で歌わせつつ指導することに大きな利点があると考えていた。

２．研究の目的

これらの時間的制約などの厳しい諸条件のなかで，学習者個人個人に合った効果的な声楽教授法を考えるうち，教師が見ることができない時間でも，学習者が主体的に練習を積める方法があることに気付いた。それは「練習曲」を積極的に用いる方法である。練習曲と一口に言っても様々な作品がある。マルケージやボルドーニのように声のメカニックに主眼を置いたものや，むしろソルフェージュとしてのジャンルに置いて考えたほうがよいもの（ヴュルナー／コールユーブンゲン），有名な作曲家によるヴォカリーズのように歌詞がないにもかかわらずきわめて芸術性の高い楽曲もある。本課題においては，コンコーネ Concone に代表される，歌詞の付いていない，調性音楽で書かれている楽曲を主に念頭に置いて研究を進めた。これはまず声楽の基本である母音の響きとつながりを訓練するためと，調性音楽はやはり教育現場では一般的で役に立つためである。

学習者は初期の段階で発声の訓練を集中的に受ける。これは時には反復練習を伴い，耳が発達していない段階では違いになかなか気付かず，単調な練習の連続になることもある。このような時間は，じつは歌うことがとても好きな学生にとってもときにつらいものである。

その結果，ある程度声が出てくるようになると，今までの想いのたけをぶつけるように歌唱そのものに気持ちが向かっていってしまい，パッセージの正しく様式的な扱いがおろそかになってしまう場合がある。この段階で，基本的だが楽しく，訓練に主眼が置いてはあるがモチベーションの高まる「練習曲」を導入し，感情に押し流されることなく練習を積むことができるようにいくつかのモデルを構築することが本研究の目的であった。下図がこの研究の各段階と，取り組むべき諸課題を簡単に記したものである。

声と歌唱の発達		
発声・発音→	←テクニック・声のメンテナンス→	←解釈・表現
入門から初級	中級	上級
スケール，音程・リズム訓練	**練習曲**	アリア，歌曲

点線はその境界が厳密ではなく，例えば中級者でも音階訓練から練習曲を通してアリアなどの訓練に進むべき事を示している。矢印も時には前段階での学習を再度繰り返す事を意味している。

このように練習曲は発達段階の中央部に位置して，常に初歩の段階と，上級への橋渡しをする役目を担っていると考える。このモデルを多くの学習者に適用し，効果を確かめ

ようと研究を進めてきた。

３．研究の方法

⑴先行研究や各種著作などの整理、それを補うための文献、楽譜、音源、各種データの収集を行った。資料に関しては、イタリアの＜コンコーネ 50 番練習曲集,25 番練習曲集, 15 番練習曲集＞（パオロ・ジュゼッペ・ジョアッキーノ・コンコーネ(1801 - 1861)による）や＜ヴァッカイ声楽教本＞（ニコラ・ヴァッカイ（1790 - 1848））などの楽譜のほか，さらにマヌエル・ガルシア（1805 - 1906）の「ベルカント唱法のヒント」など、バロックから 19 世紀の声楽の美学，教育法についての著作物を収集した。

⑵教育モデル作成のためには、研究協力者に余裕のある夏期休業中を当てる予定であったが、震災の影響で冷房を長時間用いて行うレッスン室での講習会や研究会の成否が不透明な状況であったので、23 年度は理論面での考察と、及び教育現場での取材を先行して行うこととした。

⑶研究の進捗を見ながら，次年度以降に協力を仰ぐ同分野の研究者にそれまでの研究成果を評価もしくは批判をしてもらい，この実践的な研究への協力をお願いした。同様に海外の研究協力者にも次年度以降のアポイントをとった。

⑷２３年度にまとめた「声楽練習曲」についての成立過程や歴史、教育上の留意点などを元に、作曲者の意図が十分に反映されているかどうか、また日本においてそれらが正しく理解されているかどうかを分析し、この研究の課題をより具体的に考察した。講師を招いての講習会を行い、練習曲を用いた発声を取り入れた場合の、学生の歌唱に与える影響を継続して観察した。また海外の教育機関で協力同意が得られたところから順次訪問し、ドイツ，スイス，フランス，アメリカと実地研究に赴いた。

⑸これまでに得られた資料と結果をもとに、声楽を学ぶ学習者にとってふさわしい「練習曲」とその与え方についての方法論を考えた。発表会の記録（録画・録音）を取り，学生の歌唱の発達や課題を観察し，教育へのフィードバックとして活かすとともに，得られた成果を整理してさらに研究発表を行った。

４．研究成果

バロック時代から初期ロマン派，そして現代に至る，ドイツ，イタリアなどの国のさまざまな練習曲を収集し，それらの作曲者がどのような目的で，何を目指して練習曲を書いたのかを研究し，具体的にどの作品が有効で，多くの示唆に富んでいるかを分析した。

その結果，ひとつには，日本では「ソルフェージュ」の教材として認識されていることが多く，大学入試の課題にもなっている Concone コンコーネがやはり大変に優れていて，この再評価をすべきことが明らかになり，ただ単に声楽発声的な観点からのみならず，伴奏の多様性と転調の豊かさといったことによっても，声楽学習者に本質的に重要な要素をたくさん含んでいることを再確認した。

Panofka パノフカは，コンコーネの中にはあるものの，具体的に課題が明示されていないいくつかの要素（音型や，パッセージ，装飾など）を取り出して集中的に練習できるようにバランスよく提示しており，ブレスの位置などにも示唆が多いことから，中級者から上級者までつねに手元に置いておくべき練習曲であると感じた。

また Vaccaj ヴァッカイは表題に詩的な表現指示と歌詞がついた練習曲を発表しており，独特な効果が期待されると感じた。何人かの学生にとっては，中音域で旋律が平易で，簡単なイタリア語がついているヴァッカイはとても親しみやすいと思われ，めざましい教育効果があった。

これらの練習曲を組み合わせて，学習者の習熟度に応じてどのような練習曲を与えていくべきかを，いくつかのモデルにした。

ひとつの障壁となったのは，コンコーネが我が所属機関では実技入試の科目の一つになっているため，どうしても極度に正確性のみに気持ちが傾いてしまうことであった。そこで初級者には，コンコーネ 50 番練習曲を用いて作られているミュージカル（ドレミ楽譜出版社刊。練習曲に親しみやすい日本語の歌詞が付いており，ひとつの完結した劇音楽になっている。）を適宜教材として与え，楽しく，音楽的に取り組めるような工夫を行った。これにより学生はリラックスしながら，かつ演劇を楽しみながら課題に取り組むことができ，大きな進歩を遂げた学生もいた。

もうひとつの工夫はコンコーネの歌唱部に私があらかじめ母音を指定することであった。たとえばソラシドと上行する旋律に，ｉｅａｏ と徐々に口が開く順序で母音指定して歌わせることにより，軟口蓋を高くしていくことを認識させたり,逆に ｏａｅｉと段々と狭くするように指定し，高いところを歌唱しても口が狭くなりすぎて喉が閉まらないように訓練させるといった具合である。これはしかし教師の経験力量と学習者の特性の間でここに成り立つ訓練モデルであるため，まとめるにはより多くのデータが必要であると痛感した。

練習曲教材としてのコンコーネの有用性は疑いないが，それらの提示の仕方，指導法については教師の役割がやはりたいへん大

きく，現在までのいくつかの教育モデルではまだまだ汎用性を獲得し切れていない。この点については今後のさらなる課題なので，今後もこの科研費で進めた研究成果を育てて行きたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 17 件）

① 片野耕喜（独唱），『バロック時代の金管と歌の対話』，カプリコルヌス／イスラエルよ，喜べ，ニート／心の中に炎が燃え上がるとき， モンテヴェルディ／サルヴェ・レジーナ，エーベルリン／アリアほか， ツィンク：濱田芳通，オルガン：西山まりえ，サックバット：大内邦靖，2014 年 3 月 30 日，キングスウェルホール（山梨）

② 片野耕喜（指揮，テノール独唱），『KoCoA クリスマスコンサート Vol.9』，パレストリーナ／おお，大いなる神秘，シューベルト／アヴェマリア， シュッツ／涙とともに種を蒔くものは ほか，オルガン：中島恵子ほか，合唱団『甲府コレギウム・アウレウム』2013 年 12 月 23 日，勝沼ハーブ庭園旅日記（山梨）

③ 片野耕喜（指揮，テノール独唱），『J.S.バッハ／ヨハネ受難曲』第 4 稿 1719 年版，富士の国やまなし国民文化祭 2013 ＜バッハアカデミー＞事業，ソプラノ：川口聖加，アルト：小原伸枝，バス：小原浄二，森野信夫，小林由樹ほか，管弦楽：山梨バッハアカデミーアンサンブル，2013 年 3 月 17 日，甲府市総合市民会館芸術ホール（山梨）

④ 片野耕喜（指揮，テノール独唱），J.S.バッハ／カンタータ第 4 番 BWV4「キリストは死の絆につきたまえり」，ソプラノ：川口聖加，バス：森野信夫，古楽器室内合奏団ムジカフォレスタほか，管弦楽：山梨バッハアカデミーアンサンブル，2013 年 2 月 24 日，甲府市総合市民会館芸術ホール（山梨）

⑤ 片野耕喜（テノール独唱），『G.F.ヘンデル＜メサイヤ＞』，横山和彦指揮松戸混声合唱団，ソプラノ：柏原奈緒，アルト：谷地畝晶子，バス：渡辺祐介，2012 年 11 月 25 日，森のホール２１（千葉）

⑥ 片野耕喜（指揮，テノール独唱），『KoCoA クリスマスコンサート Vol.8』，ローリセン「おお大いなる秘蹟」ほか，バッハ「マニフィカト」より二重唱，フルート：岡村孝子，トロンボーン：大内邦靖，ソプラノ：加藤謡子，オルガン：杉本周介ほか，合唱団『甲府コレギウム・アウレウム』，2012 年 12 月 22 日，勝沼ハーブ庭園旅日記（山梨）

⑦ 片野耕喜（テノール独唱），J.S.バッハ：カンタータ第 133 番《われは汝にありて喜び》，マニフィカト変ホ長調，『国分寺チェンバークワイア 創立 20 周年記念演奏会-バッハの四季 XII-』市瀬寿子（指揮），ソプラノ：駒井ゆり子，アルト：山下牧子，バス：熊谷晃ほか，2012 年 1 月 14 日，紀尾井ホール（東京）

⑧ 片野耕喜リサイタル，『シューベルト「冬の旅」全曲演奏会』，ピアノ：酒匂淳，2011 年 10 月 20 日，ルーテル市ヶ谷ホール（東京）

⑨ 片野耕喜（指揮・テノール独唱），『J.S.バッハ＜ヨハネ受難曲＞演奏会』第 4 稿 1749 年版 BWV245 抜粋， 甲府コンチェントゥス・アヴィウム＆カンターテ・ドミノ，ソプラノ：川口聖加，バス：今仲幸雄，森野信夫ほか，2011 年 4 月 16 日，森羅ホール（山梨）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ccn.yamanashi.ac.jp/~katano/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
片野 耕喜（KATANO，Koki）
山梨大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：６０３１４５４８

⑵研究分担者
該当なし

⑶連携研究者
該当なし